

氏名	金 ^{きむ} 勝漢 ^{すんはん}
学位の種類	博士(文学)
報告番号	乙第336号
学位授与年月日	2018年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第2項該当
学位論文題目	日本語の接続表現の研究 —逆接の接続助詞を中心として—
審査委員	(主査) 沖森 卓也(立教大学大学院文学研究科教授) 石川 巧(立教大学大学院文学研究科教授) 久保田 篤(成蹊大学文学部教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

序論 一研究目的及び構想一

第一章 日本語の接続表現の諸相

第二章 「が」と「のに」との比較をめぐって

第三章 「ものの」構文をめぐってー「が」構文との比較を中心にー

第四章 「ながら(も)」構文の意味・用法について

第五章 「つつ(も)」構文の意味・用法について

第六章 「のに」構文の意味・用法について

第七章 「とはいえ」構文の意味・用法について

結論

(2) 論文の内容要旨

本論文は、日本語の逆接表現についてそれぞれの意味・用法を、類義関係にある表現との比較を通して、日本語教育における使い分けの説明にも資するように考察したものである。第一章では、接続の概念、接続表現の類型を整理し、接続表現を本来的な文法的機能によって分類し、用言の活用形、並列助詞、接続助詞、接続詞、体言の形式化というように分けて取り上げられることを述べて、日本語の接続表現に関する諸問題を研究史的に総合的に概観し、本論となる逆接の接続表現に関する研究の前提とする。第二章から第七章までは、逆接を表す接続助詞による接続表現を対象として、類義表現との類義点と相違点を文法的に解明しようとする。まず、第二章では、「が」と「のに」を取り上げ、その構文の意味・用法の比較を中心として、主節の文末表現、従属節としての特徴、そして、それぞれの構文的特徴などについて述べる。第三章では、「ものの」を取り上げて、主節の文末表現、従属節の特徴、その意味・用法や慣用的表現などについて考察する。第四章では、「ながら」を取り上げ、節の形態的特徴や意味、また「ながらも」の意味などについて記述する。第五章では、「つつ」を取り上げ、従属節における述語の種類、その構文の意味・用法、および逆接表現の特徴、また「つつも」の意味などについて述べる。第六章では、「のに」を取り上げ、節の述語の特徴、主節の文末表現、その構文の意味および主節の語彙特徴、また共起する表現などについて考察する。第七章では、「とはいえ」を取り上げ、従属節の形態的特徴、その構文の意味・用法や主節の文末表現、共起する副詞などについて述べる。

II. 論文審査の結果の要旨

(1) 論文の特徴

本論文は、逆接の接続助詞を中心に、接続表現について、類義関係にある表現との比較を通して、その意味・用法の特徴を詳細に分析するものである。接続助詞が構成する従属節と主節との意味関係を考察し、また、節内部の格関係、動詞の種類やテンス・モードなどの述語の形態的特徴を分類し検討する。それとともに、主節の文末表現の形態的特徴にも注意深く論究し、さらには、節相互の意味関係について、逆接を中心に詳しく考察を加え、対比・時間的前後・補足などに細分化して捉える一方、評価性・意外性などのニュアンスをも抽出して細かく分析する。その考察の過程では、さまざまな仮説を検証した上で、新聞・雑誌などから収集した多くの用例に基づき慎重かつ丁寧に論を進め、客観的に記述する。

(2) 論文の評価

逆接を中心とする接続助詞の意味用法について、先行研究を整理し、客観的かつ総合的に分析を加えた点で大きな意義が認められる。まず、接続助詞「が」と「のに」において、「のに」による従属節は文としての独立性が低いのに対して、「が」による従属節はその独立性が高く、従属節と主節の矛盾対立が弱いことから、「は」で主題提示された文では「が」が用いられるなどの指摘は「が」の由来および用法の広がり鋭く迫るものである。一方、「のに」は従属節と主節の矛盾対立が強いことから、話し手の意外性、すなわち主節の評価に応じた不満や称賛を表すというような用法のニュアンスにまで広く言及しえた点も評価できる。また、「ながら」は状態動詞、「ている」、形容詞、名詞につく場合、それらが状態性の意味を有することから、逆接となることを明らかにしたこと、従属節と主節との逆接関係を、単に肯定と否定だけでなく、たとえば「ものの」において、従属節と主節が切り結ぶ論理的整合性、期待値やプラスマイナスの評価、予想される反論に対する補足説明などというように丁寧に分類整理したこと、「とはいえ」の従属節において「いくら・たとえ」の強調の意や「まだ・あんなに」のようなマイナス評価の副詞と共起するのは、従属節の叙述内容に対する評価に反して主節では不十分な結果である意を表すからであることなどの指摘は、主節と従属節の関係解明に大いに資するものである。接続表現全体における逆接の位置づけなど分析がやや不十分な点もあるものの、その意味用法を記述文法の観点から実証的に考察し、中でも従来あまり言及されることがなかった「つつ(も)」「とはいえ」についても詳しく分析を施すなど、接続助詞に関する研究をさらに深化させ、日本語教育にも大いに資する論文として高く評価される。